

発表要旨①

アウグスティヌスと聖遺物の奇跡

－『説教』317-324 に注目して－

東京大学 人文社会系研究科
門芳敏

紀元 36 年頃、キリスト教に一人の殉教者が「誕生」した。使徒たちによって奉仕者に任命されたステファノである。「冠」を意味するギリシア語名によって知られるこの人物は、最初に殉教者の冠を受けることになった。

最初の殉教者が誕生してから遥か後年の 425 年、この最初の殉教者によって北アフリカの教会は熱狂に包まれる。415 年に聖地エルサレム近郊で発見されたステファノの聖遺物が届けられ、人々が聖遺物を通じて治癒などの奇跡を体験したからである。西方キリスト教最大の教父アウグスティヌスもヒッポの街でこの熱狂を目の当たりにした。70 歳を過ぎたヒッポの司教は喜びと興奮と共に最初の殉教者の聖遺物を迎え入れ、起こった奇跡を丹念に記録している。その様子は『説教』および『神の国』第 22 巻から知ることができる。

しかし、およそ 40 年前のミラノにいたころのアウグスティヌスは、奇跡に対して懐疑的な目を向けていたことが『説教』88、『真の宗教』、『告白』から知られている。使徒の時代にはあった奇跡はもはや現在までは続かないはずであった。

本発表では主として『説教』317-324 に注目して、ヒッポの教会で説教をする晩年のアウグスティヌスの姿を描く。アウグスティヌスが奇跡についての考えをすでに転換させていたことを確認しつつ、聖遺物の到着によって説教の場が「心の見世物」から「天上の見世物」へと変わっていく様子を明らかにする。

発表要旨②

ダマスコスのヨアンネスにおける αἵρεσιςとしてのイスラーム（仮題）

東京大学大学院博士課程 人文社会系研究科
日本学術振興会特別研究員 DC1
荻野美櫻子

本報告では、ダマスコスのヨアンネス（c. 675 - c. 750）の著作において、彼が当時のイスラームをどのような存在として認識していたのかを分析する。

ダマスコスのヨアンネスは、主著『知識の泉』の第二部「異端について（*De Haeresibus*）」の100/101章において、「イシュマエル派」という名前でイスラームを紹介している。これまで研究者らはこの章について、ヨアンネスの独創性が発露する数少ない箇所として、また彼のイスラームに関する知識の精確さを知る縁として注目してきた。一方、「イシュマエル派」が αἵρεσις の一つに挙げられていることから、ヨアンネスはイスラームを「異端」と見做したと考えられることが多い。しかし、「異端」として通常我々が想起する西欧的な「異端」や教義形成期における「異端」と、ヨアンネスの想定する αἵρεσις とは必ずしも一致しないだろう。この点についての研究は、十分に厚いとは未だ言い難い。

したがって、本報告ではまずヨアンネスが αἵρεσις を如何なる存在として想定しているのかを、*De Haeresibus* を中心に『知識の泉』のテキスト内から浮かび上がらせる。次いで、ヨアンネスが「イシュマエル派」について αἵρεσις という観点からどのように記述しているのかを分析する。最後に、ヨアンネスが *De Haeresibus*、ひいては『知識の泉』という書物全体の中で「イシュマエル派」をどのように位置づけられているのかを分析した上で、さらにこれがキリスト教史、ならびにキリスト教とイスラーム教との関係史においてどのような意義を持つのかを考察する。

シンポジウム

東方キリスト教における〈個〉の思想

提題 1

ドストエフスキーにおける

「個」（リーチノスチ）と「キリストの楽園」

— 『地下室の手記』と「1864年メモ」を中心に—

安岡治子（東京大学名誉教授）

『地下室の手記』（1864）の第一部・第十章は、水晶宮に関する批判から始まる。水晶宮とは、「合理的エゴイズム」を唱えたチェルヌィシエフスキーの『何をなすべきか』（1863）の中で地上の楽園の象徴として描かれたパヴィリオンである。ところが、この第十章は検閲によって大幅に削減されたため、作者が本来「信仰とキリストの必要性」を訴えた「主要な思想」が抜け落ちてしまった。その抜け落ちた主要な思想を推測するには、同時期に書かれた「1864年メモ」を参照することが重要である。ここに書かれた「個」（リーチノスチ）に関する考察は、ウラジーミル・ロスキーが『キリスト教東方の神秘思想』の第六章で言及しているリーチノスチの特性に極めて近いものである。ドストエフスキーがキリストを手本として、地下室人のもつ無限に拡大されたエゴイズムでもなく、チェルヌィシエフスキーの言う「合理的エゴイズム」でもない、「自身の我を無にした自己のリーチノスチの完全な発達」を目指すべきであると述べたとき、そこに自ずから「キリストの楽園」が到来すると考えていたことについて考察したい。

提題 2

ニュッサのグレゴリオスにおける三位一体論と

その人間論的意義

—V.ロースキィ『キリスト教東方の神秘思想』の6章「像と似姿」を切り口に—

山根息吹（東京大学大学院総合文化研究科学術研究員）

本発表では、安岡治子氏が東方キリスト教の靈性におけるリーチノスチ論を扱う際に重視する『キリスト教東方の神秘思想』の6章「像と似姿」を取り上げ、そこでロースキィがニュッサのグレゴリオスに繰り返し言及しながら論を展開している点に着目する。具体的には、ロースキィがグレゴリオスに依拠しながら、(1)啓示に基づく神理解（三位一体論）から出発して、その像である「人間の真の本性を定義しようと試みる」神学的姿勢の重要性、(2)アダム（個人）に先立って人間本性全体が神の像として創造されたと考える人間創造論、(3)三位一体なる神との類比において、人間の間の実現する究極的な一致を捉える人間論を主張している点が重要になる。ロースキィ以降の教父研究においても、これらの論点に対する関心は高く議論が深められているため、それらの成果も踏まえながら、グレゴリオスの三位一体論とその人間論的意義を考察することで、東方キリスト教における〈個〉の思想に迫りたい。

提題 3

モスクワの府主教フィラレート・ドロズドフ

『聖大金曜日の講話（1816年）』

—キリストの受難における至聖三者—

小野成信（東京大学）

本発表では、近代ロシア正教会を代表する神学者であるフィラレート・ドロズドフ（1782-1867）の『聖大金曜日の講話（1816年）』を分析する。フィラレートはこの講話で、キリストの受難が「独り子をお与えになったほど」の神の愛によるものであることに着目している。さらにフィラレートは、この神の愛を「十字架に磔にする」父の愛、「十字架に磔にされる」子の愛、「十字架の力によって勝利する」聖神^o [聖霊]の愛として、三位一体の神の〈個〉それぞれがこの愛に参加していることを説きあかしている。ロースキは『キリスト教東方の神秘思想』の第六章で、人間が「人格（ペルソナ）的存在」なのは「神の像に創造され」たためだとしているが、これに従えば、神の〈個〉理解と人間の〈個〉理解とは直結しているといえる。フィラレートの講話の中でも評価の高いこの講話での神の〈個〉理解を分析することにより、東方キリスト教における〈個〉の思想の一端を探る。

提題 4

ロシア修道文学における「シリアのイサアク」の影響

— «мир» 概念に着目して—

浜田華練（東京大学）

19世紀半ばから20世紀初頭にかけて、帝政ロシアでは修道文学や修道的实践が、修道院の内部だけでなく在俗信徒の間でも大いに流行した。その中で特に人気を博したのが、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』でも言及される「シリアのイサアク」こと、7世紀後半に活動したシリア人修道士ニネヴェのイサアク（イスハーク）の『説教集』である。1854年に現代ロシア語訳が出版されたことで、修道士だけでなく幅広い層の読者を獲得した。シリアのイサアクの修道生活に関する思想の根幹をなすのは、「世界（ミール мир）」との関係性である。修道生活というと、現代人の感覚では世間から遠ざかりひたすら「個」の内面へと沈潜していくイメージがあるが、少なくともイサアクにとって、修道的生は神による普遍的救済の計画の一部であり、決して個とそれが属する世界とを切り離す行為ではなかった。イサアクの著作で提示された「世界」と「個」との関わり方が、それに続くロシアの修道文学でどのように受容されたかを検討する。

発表要旨③

Ф.М.ドストエフスキー『悪霊』—原題“Бесы”選定理由に関する一 考察(仮題)

日本大学
坂下将人

『悪霊』(1871-1872)はФ.М.ドストエフスキー(1821-1881)によって執筆された五大長編の一作である。原題はБесы(бесы)であり、「悪魔」、「悪霊」を意味する бес の「複数形」である。ロシア語には「悪魔」、「悪霊」を意味する単語として、бес の他に чёрт、сатана、демон、дьявол、нечисть、злой дух 等が存在する。ドストエフスキーは上記一連の単語の中から、なぜ“бес”を取捨選択したのか。『悪霊』の原題はなぜ“Бесы”(“бесы”)ではなくてはならなかったのか。

ロシア語で「天」、「天国」、「空」を意味する“небо”を用いて『悪霊』の原題選定理由に関する仮説を構築し、検証を試みた。небо は「単数形」であり、небо の「複数形」は небеса である。前述したように、『悪霊』の原題 Бесы は「悪魔」、「悪霊」を意味する бес の「複数形」であるから、最初に небо の「複数形」である небеса に着目し、「небеса = не(「否定」)+ бес(「悪魔」)である」と仮説を立てた。次に「単数形」の небо も同じく、「небо = не(「否定」)+ бог(「神」)である」と仮説を立て、「небо の本来の形は“небог”(“небога”)である」と論証した。従って、本発表では「ドストエフスキーは原題選定時に небо を意識し、念頭に置いた небо を“небог”(“небога”)、небеса として「解釈」した結果、「神」を意味する бог に「対立」する「悪魔」が бес であると考えたからこそ、『悪霊』の原題に бес(бесы)を選定した」と結論付けた。

発表要旨④

カルケドン派教会と非カルケドン派教会との エキュメニカル対話におけるキリスト論の合意の内容

上智大学
角田佑一

本発表では、1960年代以降、ローマ・カトリック教会とイースタン・オーソドックス教会（いずれもカルケドン派教会）がそれぞれオリエンタル・オーソドックス諸教会（非カルケドン派教会）とのエキュメニカル対話の中で、どのような内容のキリスト論の合意に至ったのかを明らかにし、各々のキリスト論の合意の内容を比較しながら共通点と相違点を探り、その神学的背景を解明する。

第一にローマ・カトリック教会とオリエンタル・オーソドックス諸教会とのキリスト論の合意の内容を考察する。この合意の特徴は、キリストの神性と人間性との合一を強調しながらも、キリストの一つの個的存在を表現するためにヒュポスタシスという語を用いず、「受肉したロゴス」という中立的な語を用いることである。

第二にイースタン・オーソドックス教会とオリエンタル・オーソドックス諸教会とのキリスト論の合意の内容を考察する。この合意の特徴は、キリストの神性と人間性との合一を強調しつつ、キリストの一つの個的存在を表現するために、「一つの総合的（synthetos）ヒュポスタシス」という語を用いることである。

第三にローマ・カトリック教会－オリエンタル・オーソドックス諸教会のキリスト論の合意の内容と、イースタン・オーソドックス教会－オリエンタル・オーソドックス諸教会のキリスト論の合意の内容とを比較し、両者の共通点と相違点を探り、その神学的背景を解明する。